

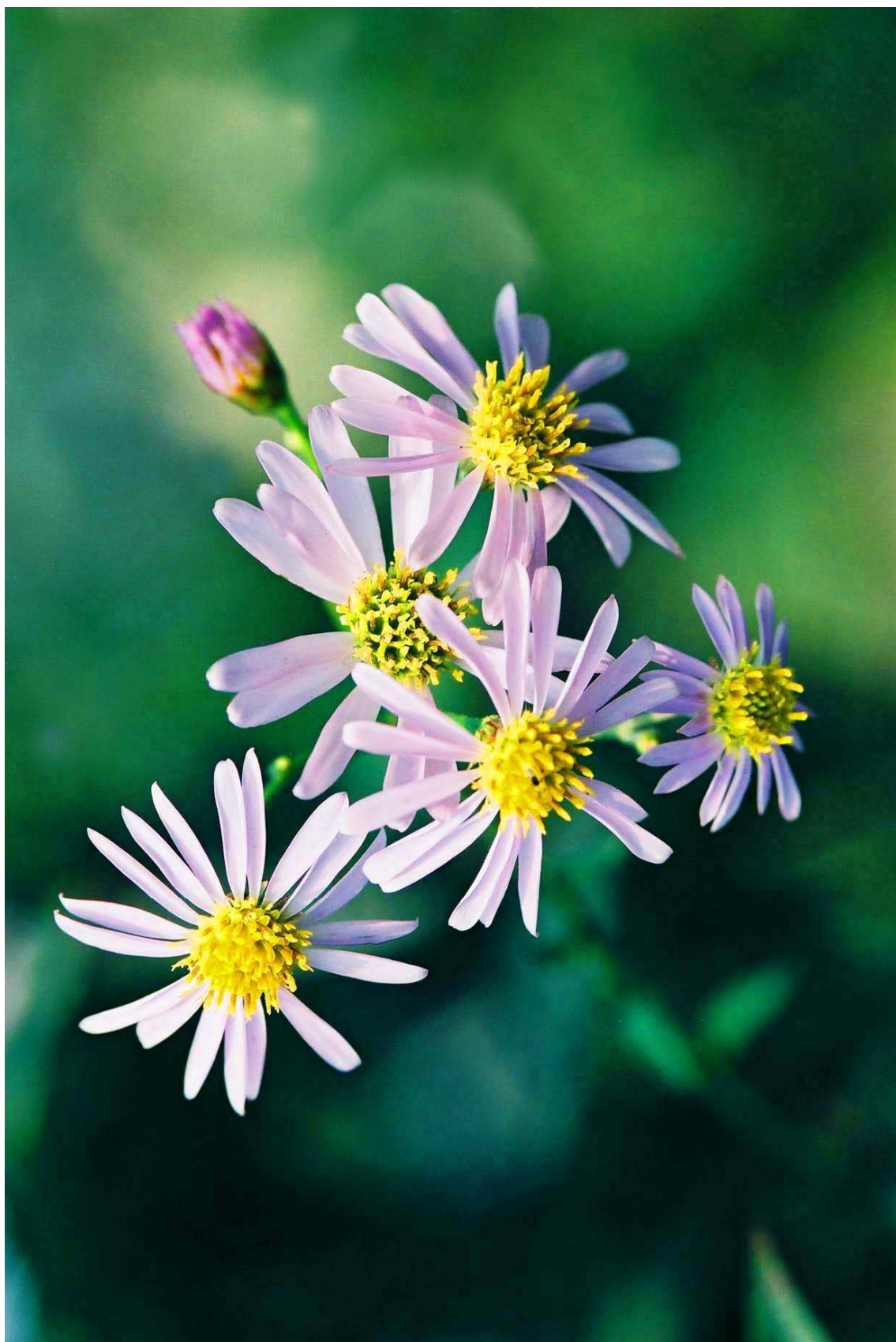
## 7) シオン=紫苑

シオンはキク科の多年草で、本州の中国地方や九州の山地の湿草原に自生する。日本以外の自生地は朝鮮半島、中国東北部を中心とする北部中国、モンゴル、それにシベリアなどである。シオンの茎は直立して高さは1~2mほどで、上部で分枝してよく繁る。根出葉は有柄で大きく花期には枯れるが、茎葉は小さく上に行くに従って無柄となる。葉の形状は先がとがった長楕円状の披針形で、縁には鋸歯がある。8~9月ごろ大形の散房花序をつけ、花径3~3.5cmほどの頭花を多数開く。和名の由来は根茎が紫色を帯びているためで、漢方名の『紫苑』をそのまま用いたものである。別称としては背の高いところからロクシャクバナとか、セイタカバナなどの他、シオニ、ジュウゴヤバナ、オモイグサ、オニノグサなどがある。学名は『*Aster tataricus*』で、属名は星を意味し、種小辞はタタール(中央アジアの地名)のという意味である。中国での呼称は『女蒂』『紫蒂』『返魂草』などがある。

紫苑は日本ではもっぱら観賞用として庭に植えられたり、切り花として利用されているが、中国では古くから薬草として用いられ、紀元2~3世紀ごろに記された『神農本草経』(シンノウホンゾウキョウ)にはすでに現れている。根にはアスター、サポニン、シオノン、ケルセチンなどのアルカロイドを含み、漢方では根を乾燥させたものを『紫苑』と呼んで、煎じて利尿、鎮咳、去痰剤として用いた。このため日本には薬草として、平安時代の初めごろまでには、中国から輸入されたものと思われ、901年に記された『新撰字鏡』(シンセンジキョウ)にはすでに「紫苑、和名、加乃志太」と記されている。カノシタとは「鹿の舌」のことで、湯浅浩史先生は根出葉を鹿の舌にたとえたものだろうと述べられている。

紫苑の野性種は現在では絶滅危具種に指定されており、不思議なことは前述のように、中国地方と九州の山地に限られて自生することである。もともと繁殖力があまり強くなかったものとも思われるが、何故この地にものみ自生するのだろうか。そこで思い出していただきたいのは、タブの木(03-04-08-11~12)のところで見てきたように、中国地方は『巫覡(ワケモノ)集団』と思われる渡来系の人々の、植民地であったと推測される点である。この地にはもともと野生種も栽培種も含めて、薬草類がすこぶる多い。同様に九州も渡来系の人々の足跡が色濃く残る地方である。紫苑の自生地はこうした日本の創世記の歴史を、今にとどめているようにも思われるのである。

紫苑は『古今和歌集』以来、多くの勅撰和歌集や『今昔物語』『曾我物語』などの物語に、また襲(カサネ)としての紫苑は表は淡紫、裏は青、もしくは表が紫、裏は蘇芳で、『枕草子』や『源氏物語』などにもしばしば登場する。室町時代以降になると絵画の素材として取り上げられ、京都の『智積院』(チシャクイン)の襖絵には、長谷川等伯の素晴らしい絵画が今日に残されている。永井荷風も『見果てぬ夢』の中で、「…手入れはせずとも自然と葉鶏頭や紫苑などの秋草が生えて…」と紫苑に触れている。

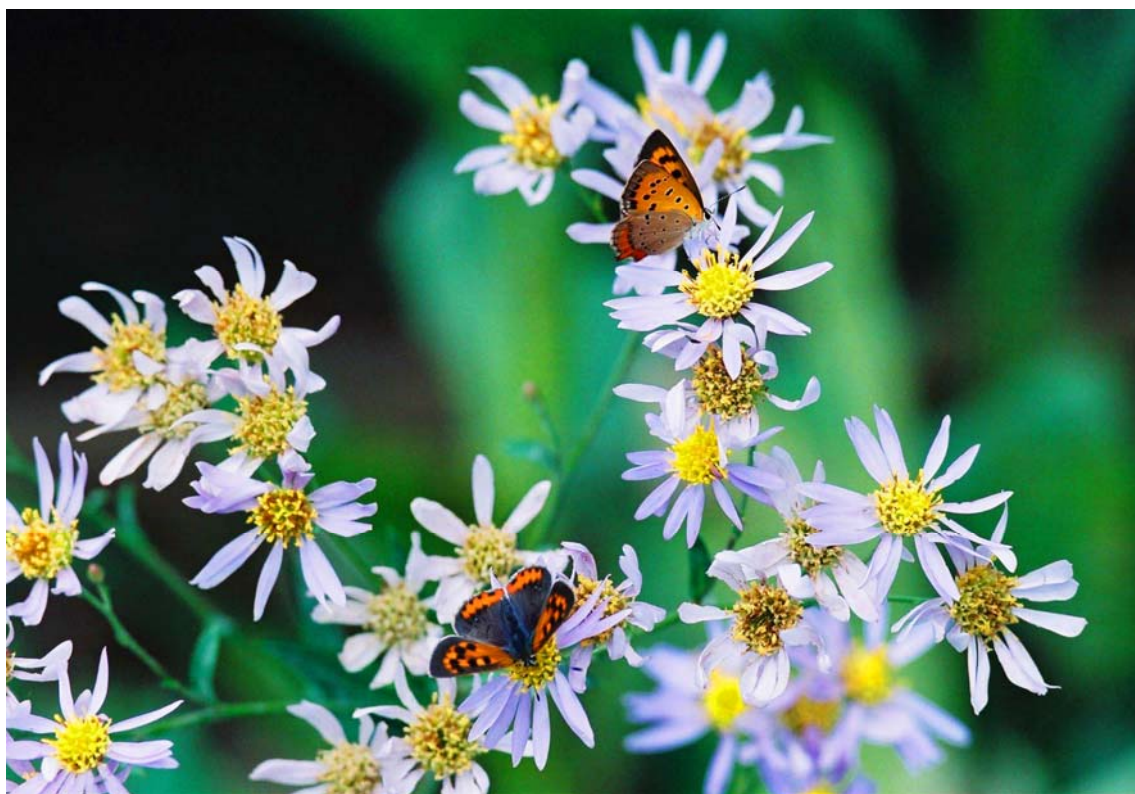


中国地方や九州のみに自生するシオンは絶滅危惧品種でもある(東京都小平市薬用植物園)。





漢方では煎じて利尿、鎮咳、去痰剤だが、花は楚々としてなかなか美しい。子供のころには我が家の庭にもあったが、いつのころか、なくなってしまった(埼玉県小川町)。



花にはミツハチやチョウ(ベニシジミ秋型)が集まる(埼玉県小川町)。

[目次に戻る](#)